

近年伸びている国内の観光地は、文化や自然に加え、まちとしてまとまりがあり、住みたくなるような環境で共通している。従来の観光産業振興的な観光政策ではなく、住む人にも訪れる人にも優しいまちづくりを進めることが、観光立国を目指す上でも重要になる。

中小都市で観光客増加

近年、「観光まちづくり」が叫ばれるようになってきた。観光の側からまちづくりの対象を広げる動きがある一方、まちづくりの側からも観光への関心が高まっている。人口減少かつ高齢化の社会では、今日の生活を踏み台にして明日の楽しい生活を夢見るといっ



経済教室

昇志向型生活より、今日の生活を大切に感性面での充実を求める傾向が強くなる。日々の生活を大切に、自然や歴史、人々とのふれあいを求め、五感を刺激する食文化や伝統文化の重視へとつながる。こうした魅力を満喫するための観光や交流が盛んとなる。

ただ、安価で風景も美しい海外への旅や大都会の巨大開発を訪れる観光客が伸びる一方、国内の伝統的観光地は低迷している例が少なくない。美しい魅力的な風景が限られてくるからだろう。

そんななか、近年観光客を増加させていくつもの共通点に高感度の中小都市がある。

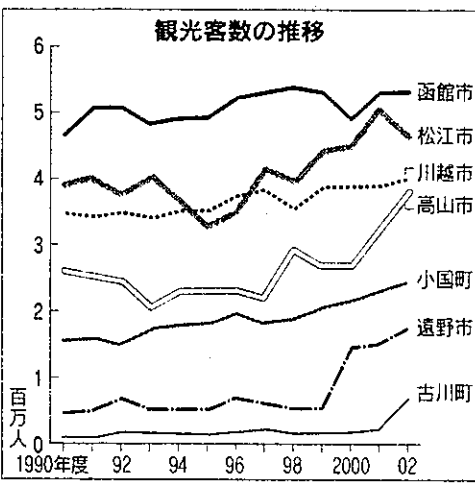
高感度なまちづくり推進

これらのまちを見渡すと、歴史や文化の薫りがただよび、自然があふれ、まちのイメージを代表する風景がある。そして多くの場合、魅力的なリーダースタートがいて、日々まちがさらに改善されている。生活を大切にしつつ、一軒一軒の建物のしつらえから始まって、みんなでまち自体をよりよく整え

潤いの景観に客足

地域の資源を掘り起こせ

潤い地帯を目指す。交流人口は増えていく地道な努力がなされている。つまり、まちづくりに消費のターゲットではない。交流が盛んになることによる結果的に地域も潤うことになる。こうした結果としての観光立国を目指す。論は、『近き



西村 幸夫 東京大学教授。まちの全体、さらには周辺の田園風景やまちへのアプローチまで含めた環境を整えることが重要な国士を維持・形成する必要がある。観光立国行動計画は、二〇二〇年には百五十万人、二〇二五年には二百五十万人、二〇三〇年には三百五十万人と見込まれている。観光立国行動計画は、二〇二〇年には百五十万人、二〇二五年には二百五十万人、二〇三〇年には三百五十万人と見込まれている。観光立国行動計画は、二〇二〇年には百五十万人、二〇二五年には二百五十万人、二〇三〇年には三百五十万人と見込まれている。



「近況遠来」型まちづくり。人口減少社会の到来で、とりわけ農村部のむらおこしには、定住人口のみならず交流人口を確保することが不可欠となってきた。田舎暮らしを大切にしながら、一軒一軒の建物のしつらえから始まって、みんなでまち自体をよりよく整え、結果的に交流人口を増大させる。観光立国行動計画は、二〇二〇年には百五十万人、二〇二五年には二百五十万人、二〇三〇年には三百五十万人と見込まれている。

出生率低下 労働力不足 日本企業との協力を通じて